

なぜ存在しないものについて語るのか

—— フィクション言説の機能について

岡田 進之介 (東京大学)

本発表はフィクションを巡る実践を、その言説の果たす機能の観点から説明することを目指す。

英米圏の現代美学(分析美学)のフィクション論においては、フィクションの本性に関する議論が積み重ねられてきた。そこで批判を受けつつも現在「標準理論」とされているのは、Currie(1990)を代表とする虚構構成的発話理論である。これはフィクションを「受け手がその内容をメイクビリーブ(想像)するように作者が意図した発話」とする理論であり、虚構的な命題(=虚構的真理)と、それに対する読者のメイクビリーブという命題的態度によってフィクションを説明する。例えば『シャーロック・ホームズ』シリーズは「ホームズは探偵である」などの、読者がそれをメイクビリーブすることを意図した虚構的命題を含むフィクションだということだ。

しかしフィクションの多くは現実に関する主張(例えば『戦争と平和』におけるナポレオン戦争の記述)を含み、また哲学論文などの非フィクションもまた思考実験などの虚構的な命題を含み得るため、標準理論は言説としてのフィクションと非フィクションの区別を説明できないという問題が指摘されてきた(Friend 2008)。つまりそこでは〈作品を構成する個々の命題の虚構性〉と〈作品がフィクションであること〉の関係をどう説明するかが問題になっている。この問題に関しては、フィクションを必要十分条件を持たないジャンルとすることでフィクションを構成する命題は虚構的である必要はないとする論者(Friend 2012)や、そもそも現実に真である命題もメイクビリーブすることができるため虚構文と主張が同居することに問題はないと主張する論者(Stock 2017)などの間で議論が続いている。しかしそれらの議論は命題の虚構性とフィクション作品の関係を論じつつも、作品そのものの目的や機能という観点からフィクションと虚構性の関係を問うことは無かった。

本発表ではフィクション概念を現実の事実への「非忠実性」によって分析した David Davies (2007) の議論を参照しつつ、フィクションは特定の機能を果たすために合理的な形でデザインされた言説であり、命題の虚構性はそのデザインの一部だと主張する。つまりフィクション作品は感情の喚起(ホラー、コメディ)や直観の明確化(思考実験)、あるいは道徳的教訓(寓話)などの目的を持ち、作品はその目的を達成するために形作られている。そこで現実の事実に関する命題は作者が内容を恣意的に決めることができず、また文脈によって様々に解釈されるため、作品の目的に適さない可能性を本来的に内包している(そのため事実はしばしば作品の目的のため脚色=虚構化される)。一方で、虚構文は内容が現実で真であることを必要とせず、恣意的にその内容を決定できるため、作品の目的を達成するのに適しているのだ。